



office空と海
平井 吉信

中小企業診断士

平井吉信 コーナー

原田一美さんの児童文学 「博士になった丁稚どん」「青い目の人形」

幼い頃、父にドブ釣りに連れていつてもらった。ドブ釣りとは、アユの解禁初期に淵で毛針を上下に動かす釣りのこと。天候、太陽の位置、水の透明度、川底の珪藻などによって毛針を選ぶ。当時小学生のぼくも毛針の固有名詞を覚えていた（岡林1号、青ライオン、八つ橋など）。毛針は近くで眺めるとなかなか美しい工芸品のようでもある。ドブ釣りは錘を付けるので、ときたま底にかけてしまう。鉛は惜しくないが、毛針は惜しいので鉛が仕掛けからはずれやすくなっていたと記憶している。

谷崎鱗海さんという釣り名人がいた。どこでその名前を知ったかというと、父が口癖のように「鮎釣りを谷崎名人におそわった」「谷崎鱗海さんが…」。谷崎名人の自称弟子ということなのだろうが、真偽はわからない。

鱗海さんの本名は義男という。那賀川中流の相

生の生まれで子どもの頃から那賀川の主といわれる鮎釣りの名人であった。しかし勉強もせず、親に隠れて釣りばかりしていたので、とうとう勘当され、12歳で徳島市佐古の美馬商店で丁稚奉公を始めた。

熱心な勤務態度が主人に認められ、（こっそりと勉強していた）勉学を許されて丁稚をしながら学校に通わせてもらえることになった。ひとりになって勉強ができるありがたさが身にしみたのだろう。17歳で店の最年少の番頭となり、その後ご恩を返したあと、故郷で油屋を開業。誠実な商売で事業を発展させた。

若い頃、肋膜炎にかかった奥様を至れり尽くせりの手当を行って数年で回復させた。商売で貯えたお金をすべて吐き出してしまった谷崎さんであったが、ご恩のある美馬商店がのれん分けとして徳島市二軒屋町に店をもたしてくれた。

小学校の恩師榎原先生、それに命を救った奥さんの後押しで勉強を再開、次々と合格を果たしていく。ついに、小学校中退でありながら高等文官（いまでいう国家公務員のキャリア）の試験に合格（当時は2万人に1人といわれた）。

しかし…谷崎さんは、商売を続けることにした。野に咲いてこそと、徳島で商売を続けながら生きていくことにした（感動的なくだりなので原書でどうぞ）。

昭和11年のある日、谷崎さんは吉野川の河口に釣りにやってきた。そこで自らの人生を振り返って感慨にふけていた。その足元に一生を終えて身を横たえたアユの姿が…。短い一生だったけれど、アユの鱗に刻まれたいのちの証しにはっとして鱗海の誕生する瞬間である（これもぜひ原書で）。

順調な商いを番頭と丁稚に任せて、自身は一生

をアユの研究に捧げることにしたのだった。やがて14年をかけて吉野川に棲む魚種を38種類と結論。同様に那賀川では41種類と特定。これは川という生態系を知る土台となった。鱗海さんは自由な研究の真実の愉しさに気付いてしまった。アユの生態調査は30年にも及ぶ（まるでアユを隣の人を観察するかのよう）、血の通った生き物の生態を解き明かしていく。

アユは夜も遡上するという説に対し、夜の川に入って何時間もじっとしながら闇に目を慣らしてアユの寝顔を観察すると昼間のどう猛な顔つきと違うことに気付いた。

谷崎さんの研究はダムができる前の時期であった。吉野川、那賀川、勝浦川は昭和40年代にダムが整備され、下流に土砂が供給されなくなる河床低下や川底の藻が泥をかぶる弊害が問題となるが、これはそれ以前のこと。

県内のどの川のアユがおいしいかを釣り人に尋ねたところ、鮎喰川という答えが圧倒的に多かった。理由は良質の苔を産することにあった。伏流水と山から入る沢の影響で水温が低く保たれることが原因と突き止めた。

ほくは、川の大きさも関係しているのではと思う。大きな川の魚は、水流の多さから（＝水圧の大きさ）から骨が太くなる傾向があるように思う。四十万川本流よりもおそらくは黒尊川、吉野川よりも穴吹川や鮎喰川などの支流が魚の風味では優位になる可能性はある。

流域の山々の微量ミネラルも影響しているように思う（ミネラルは骨の形成に影響があるだろう。骨そのものがミネラルの貯蔵庫なのだから）。これらの要素も鮎喰川に有利に働いたのではないかと考える。そういえば、きき鮎で上位に選ばれる川、例えば安田川などもそう

だが、必ずしも水質（同じ地域の野根川は日本有数の水質だろう）で最上級とは言えないのに鮎の風味は佳い。

再び谷崎さんの人生に戻そう。終戦を迎えるとGHQの民主化改革により戦前に74人の店員を雇用した谷崎さんの事業と財産は没収された。さらに奥様が難病にかかり、生活は一変した。

小さな釣り道具屋を経営しつつ、一家がささやかな暮らしをしながら店を息子に譲り、自身は釣りの知識を活かして指導や講演を行うようになっていた。あるとき京都大学の研究者に声をかけられたことがきっかけとなり、『234文字の論文「海水温、淡水温によるアユの生態、習性について」が認められて博士号を取得する。

谷崎鱗海さんを綴った郷土の児童文学作家の原田一美さんは「理学博士の学位は、その不屈の意

志と、限らない努力に咲いた花でした。徳島の手と、魚たちが、鱗海さんに捧げた賛歌でした」と結んだ（「博士になった丁稚どん」。この著書が絶版でもはや入手できないのは徳島県にとって文化の喪失ではないだろうか。また、谷崎鱗海さんの名前も『上ですらなかなか見つけられないのが残念』。

原田一美さんと書籍に編集された（株）教育出版センターの乾孝さんに心から感謝したい。原田先生は、富田小学校の元校長で徳島の児童文学作家。数多くの徳島にまつわる著作を残され、2016年3月1日に89歳で亡くなられた。ご冥福をお祈りいたします。

原田先生は、美郷でのホテルや神山町の神領小学校のアリス人形についても取材され、それぞれ「ホテルの歌」「青い目の人形―海を渡った親善人形と戦争の物語」にまとめられた。



後者は、昭和2年に国際親善を担った人形のたどった過酷な運命とそれに抗い守ろうとした人たちの物語。（阿部ミツエ先生もすでにこの世にいないけれど）。それから大南さんらのご活躍でアリスは里がえりも果たすことになった。

美郷や神山が注目を集めているが、その背景には自然や文化を大切にしてきた人たちの伝統があるのだ。